

横手絞 —鹿ノ子と小帽子絞りによる絞りの意匠—

秋田の絞り染めで有名な平鹿郡浅舞に近い横手でも藍の絞り染めが行われていた。有名な浅舞絞りの陰にかくれた感じで製品、技術等は分明でないが、浅舞絞りと同様に、豊後や有松、鳴海系の技術の影響のもとに生産されたと見られる。九州から絞りの職人を招聘したと言う伝承も残されている。また、これ以前にも絞り染めが行われており、畳み絞り、紅絞りなどと呼ばれる絞り染めがあったと伝えられている。

弘化2年(1845)に横手で生産された藍染木綿の品目のなかに「大入絞」「小入絞」「模様絞」「山道絞」「馬形絞」の名称がみられ、これらは秋田領内だけでなく、南部、山形、津軽、本荘、亀田、矢島、酒田、仙台などに輸出されていたとされている。

「山道」は山道のようなジグザグ模様、「馬型」は小さな巻き上げ絞りや鹿子絞りを馬の足跡のようにパラパラと並べた模様である。両者とも長手拭(かぶりもの)の意匠に多く見られ、秋田では「山道」は未婚の女性を用いる意匠であった。「大入絞」「小入絞」「模様絞」がそれぞれどのような意匠なのかはよくわからないが、「模様絞」は花や蝶などの意匠を用いたものと推測される。

津軽地方で「つづれ」と呼ばれる衣服に多くの藍の絞り染めが用いられている。これらには濃紺地に小帽子絞りと、鹿子絞りで花や蝶が染め出されているものが多い。同様のものは秋田県内でも多く残されており、横手に残されている型紙などから、これらの絞りが、横手の製品であろうと指摘されている。また、この手が前述の「模様絞」にあたるものと考えている。現在見られるものは浅舞の上絞りに較べてあまり手のかからない量産向きの意匠の製品であるが、素朴な絞りの味わいをもつ魅力的な染めである。

秋田県内に残されている、藍の絞り染めのほとんどは横手絞、あるいは自家絞で、浅舞絞は極少ない。

◆横手絞の意匠と技術(模様絞り) —鹿ノ子と小帽子絞りによる絞りの意匠—

横手絞の特徴は花や蝶、流水文様などの主題を繰り返した意匠である。布全体として上下ができないようにモチーフの向きを変えながらレイアウトされている。花や蝶の花弁、羽等の単純な形を小帽子絞りで表現し、茎、枝、流水等の形を鹿子絞りを連ねて表現する。

鹿子絞りは白い小さな円模様を作る技術である。鹿子絞りには、指先のみで摘んで括る方法と、突き出し鹿子、機械鹿子がある。

突き出し鹿子は布を突き抜けない程度に尖らせた串を立て、布をかぶせて尖った布の先端に糸を巻き引き締めながら串から抜きあげ、そのまま何回か糸を巻いて止め小さな根巻き絞りを作る。機械鹿子は横位置に固定した小さな鉤針に、絞る鹿子の中心を掛けて軽く引いて尖らせた布の先端に糸を巻いて引き締め止める。絞りができたら鉤針からはずす。

突き出し鹿子は、丸みのある柔らかな鹿子模様になる。機械鹿子はやや四角い感じの鹿子になるが、布を強く引きすぎると鹿子が長くなる傾向がある。鹿子を絞る能率は断然機械鹿子の方がよいが、突き出し鹿子の柔らかな形には捨てがたいものがある。何れもくくりが簡単に解けないように絞るためには少々練習が必要である。

小帽子絞りは白抜きの模様を作る技術である帽子絞りの小さなものを言う。形の輪郭を糸で縫って引き締めてから、防染のための素材(油紙、ビニール)でくるみ、それを糸できつく巻き上げて染料が中に入らないようにする。

古い絞りの製品を見ると、鹿ノ子絞りと小帽子絞りが逆の側から絞られているのがわかるものがある。浅舞で書かれた『雪国小記』の中の「染織百話—八十翁談」の絞染の項には「白く抜く部分は油紙で固く包んだ。例えば花模様の花瓣のごときはその地白を後に引き、くす線とは反対にして締めた。」と記されている。

◆絞り染めの工程

- 1) 絞りのデザインを布地に青花や代用青花で下描きする。

2) 小帽子絞りの輪郭を糸入れする(粗い針目でぐし縫いする)。糸止めができる程度に糸を残して切っておく。

3) 鹿ノ子絞りをする。

小帽子絞りの輪郭の糸を締め、縫い糸の上を2~3回糸で巻き締めて止める。

4) 帽子絞りをする。布やビニールをかぶせて糸で巻き上げて絞る。端っこの部分は色が入らないように特にしっかり巻き締める。

古い絞りの製品を見ると、鹿ノ子絞りと小帽子絞りが逆の側から絞られているのがわかるものがある。浅舞で書かれた『雪国小記』の中の「染織百話一八十翁談」の絞染の項にも「白く抜く部分は油紙で固く包んだ。例えば花模様の花弁のごときはその地白を後に引き、くす線とは反対にして締めた。」と記されている。

横手やその周辺で盛んに絞りが生産された時代(江戸末~明治)には油紙等の素材が帽子絞りの防染に用いられていたが、防染力が十分でないので、より良く白を抜くために裏側から帽子絞りを施したものとみられる。また、実際に絞ってみると、裏から帽子絞りをする方が、先に絞った鹿ノ子絞りを崩す恐れが少なく、絞りやすい。また、蝶の胴や花の芯等、真ん中に来る帽子絞りの部分は周りの帽子絞りの部分とは反対の側から絞った方が入り組まなくて絞りやすい。

巻き上げ絞りは裏から絞ったものと表からしぼったものは違って見えるが、帽子絞りは裏から絞っても表から絞っても白抜きなので変わりはない。

5) 藍で染める。

この絞りでは濃紺の地に斑を作らないように染める。しかし、絞った布のような、くしゃくしゃになった布を普通に染めれば必ず染め斑ができる。

斑無く染めるためには、染める布の水分をできるだけ少なくして染める。また、染液の中で布をよく広げながら手早く繰って染める。あまり長時間染液の中に置かない。長時間藍の染液の中に置くと液に接している面は濃くなるが、襞になった内側は一定以上濃くならない。発色にあたっては、部分による発色の遅速が少なくなるように、染めた布を手早く広げてぱたぱたさせ風を入れたり、叩いて染液を布の中で移動させたりする。また、いきなり濃く染めないで、少しずつ濃くしながら充分濃色になるまで染めた方がよい。

布の水分をできるだけ少なくして染めるが、あまり少ないと、帽子絞りの中に藍が入ってしまう。本当はどのようにして染めたのか、手がかりが無くてよく分からないが、この教室では、水に浸した布を脱水機で軽く脱水してから染める。

染め重ねは充分に発色させた後再び軽く脱水をかけてから行う。

◆ 作品例 (新) は新規にデザインされた横手風の意匠



蝶花文様絞染浴衣 今野寿子/山本町



長谷部



(新) 横山和子 / 秋田市



川口則子 / 秋田市



(新) 高橋キサ / 千畑町



(新) 大友ひろみ / 秋田市



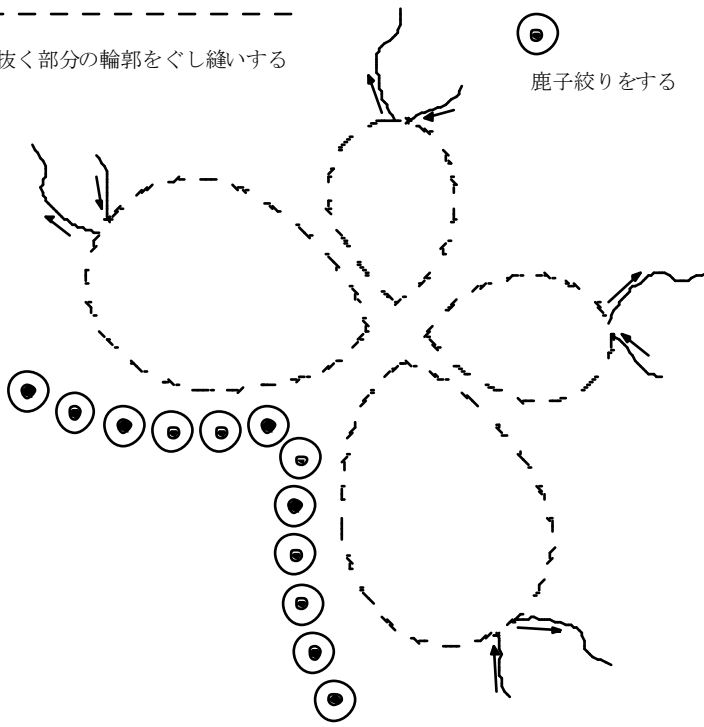
(新) 加賀郁子 / 秋田市



(新) 飯塚芳子 / 湯沢市

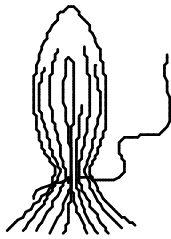
白く抜く部分の輪郭をぐし縫いする

鹿子絞りをする

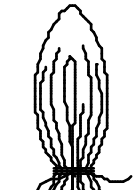


小帽子絞り

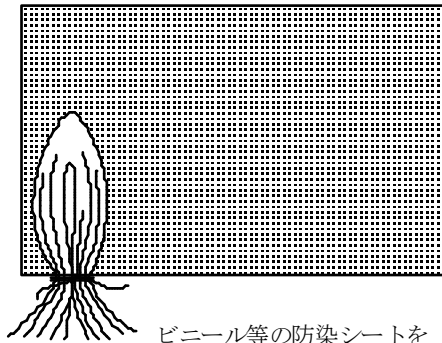
ぐし縫いの縫い糸を引き締める。



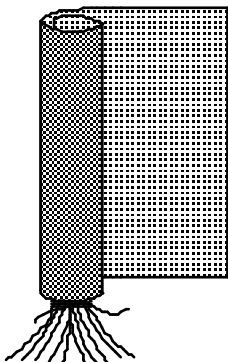
余った糸を2~3回巻き締めて止める。



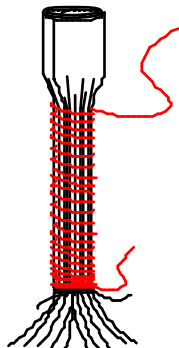
ビニール等の防染シートを巻き付ける。



ビニール等の防染シートを巻き付ける。

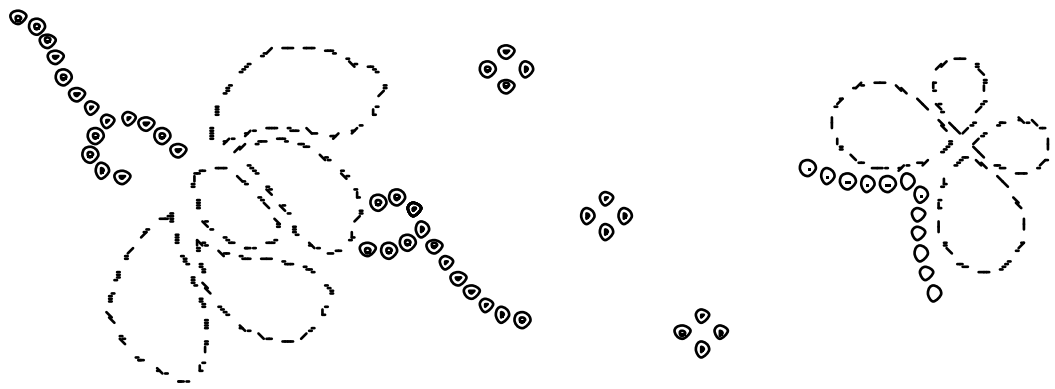


防染シートの上を巻き上げる。根本は特にしっかりと。



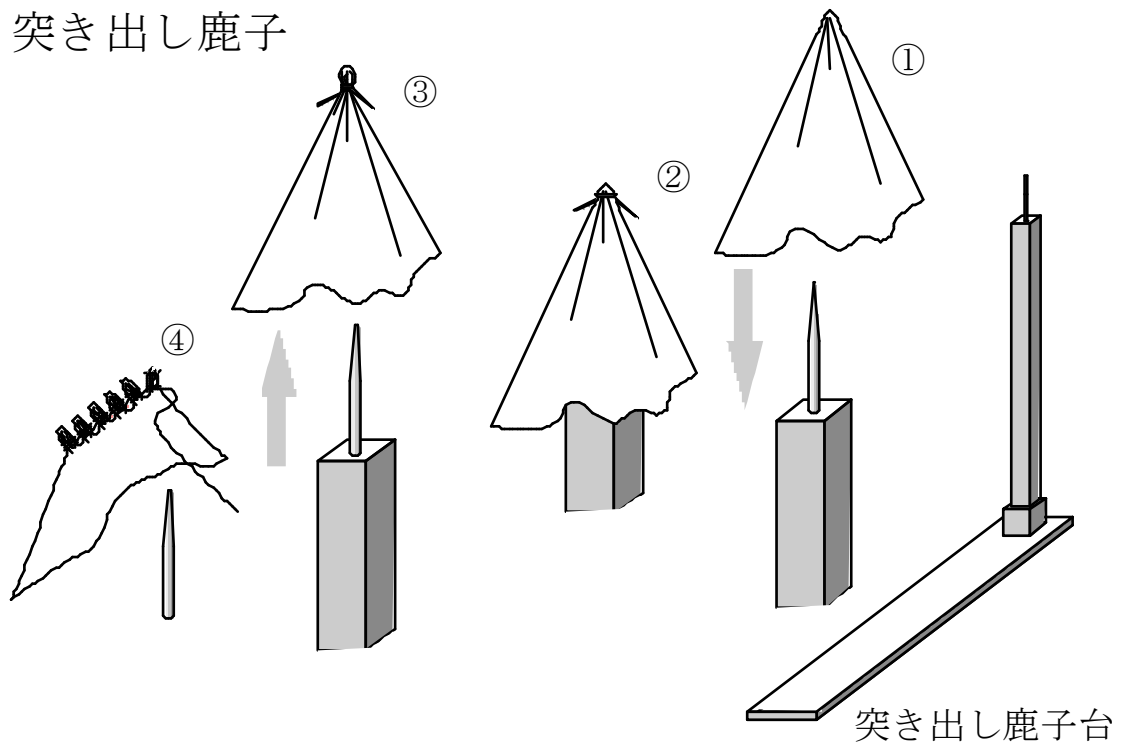
シートの上部を折り曲げて、根本まで巻き下げて止める。





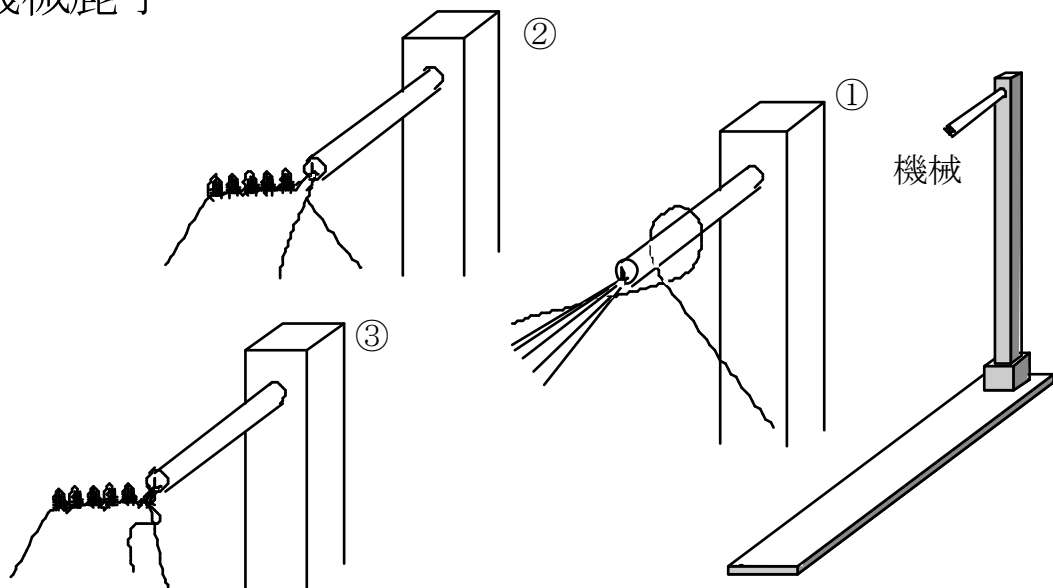
鹿子絞り

突き出し鹿子



突き出し鹿子台

機械鹿子



機械